

季刊

2008年春号/第19号

海堡

kaihou

東京湾海堡ファンクラブニュース

No.19

編集・発行/東京湾海堡ファンクラブ
会長 小坂一夫

発行日/2008年3月10日

題字は、明治39年10月1日陸軍大臣寺内正毅から外務大臣林董宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。
紋様は、尾形光琳：『八橋蒔絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。

目次

- 東京湾海堡ファンクラブ見学会報告
「鎌倉」和賀江島見学と鎌倉市役所訪問
仲野 正美
- 小林一茶と富津 藤平 俊雄
- 父と歩んだ砲台めぐりの旅 山本 忠夫
- 富津議会 平成19年9月定例会
- 吉本充県議の県議会での質問
- 第一海堡に更に立ち入り禁止の看板ふえる
- 海堡関連新聞記事

東京湾海堡ファンクラブ見学会報告 「鎌倉」和賀江島見学と鎌倉市役所訪問

東京湾海堡ファンクラブ幹事 仲野 正美

2007年9月25日(火)10時鎌倉駅東口集合、参加者20名
鎌倉駅に集まった20名は、元気に最初の目的地・元八幡へ。
もともこの地にあった源氏の氏神・石清水八幡を現在の鶴岡に移したのが、源頼朝で治承4年(1180)のことでした。それ以来、最初からあった場所を元の八幡というようになった。今はだいぶまわりの木が伐採されてしまったが、木々に囲まれた朱塗りの小さなお宮が残っているが、ちょっと見落としてしまいそうなこじんまりした神域であるが、数百年前に源氏の人々がこのお宮に参ったということを偲ぶに、最適な空間に思われる。



元八幡 (2007.9.25撮影)

なお、現在はだいぶ海から離れているが、当時は由比ガ浜が湾入しており、八幡宮は海岸近くに建てられたことが推定されている。

次に、向かった先は和賀江島へ。

ここでは、和賀江島について、調査研究をされた当ファンクラブの島崎武雄氏から、お話を聞く。おりしも、潮の引いた和賀江島を見渡せる場所で、お話を伺った。



和賀江島にて (2007.9.25撮影)

- 和賀とは、この材木座附近の古名。
- 和賀江島とは、飯島岬より西方に突き出た築島をいった。
- 鎌倉時代の古記録(吾妻鏡)によると、鎌倉への物資の多くがこの由比浦(由比ガ浜)から陸揚げされた。

- しかし、この由比ガ浜は遠浅の砂浜で港湾としての利用には障害が大きかった。
- 貞永元年(1232)僧・往阿弥陀仏が幕府に願い出て、この築港を 25 日間で完成させた。
- 構造は伊豆半島の頭大から一抱えぐらいの石を海に沈め、積み上げたものであった。
- 全体として、島状の構造物の内側に内港を有し、島の陸側水域を外港として使用する形式の港であった。
- 和賀江島築港の目的は鎌倉への国内物資運搬だけでなく、文献や出土する遺物などから遠く中国（宋）との交易など、外貿港という側面も考えられる。
- 鎌倉の地は鎌倉幕府が滅び、関東府（室町幕府）がなくなると、歴史の舞台から、遠ざかる。ふたたび、歴史に登場するのは江戸も中期（1764）になり、廻船業者と漁民の争いに使われた絵図によって、和賀江島が私たちの目に触れるようになる。
- この絵図をもとに、江戸時代の築港の様子を知ることができるよい史料であるが、丸石を積み上げたこの港は鎌倉当時の築港と同じ証拠はどこにもない。築港復元には多くの問題を残している。
- 大正 12 年（1923）の関東大震災では、この和賀江島築港は 0.8～1.0m 隆起したと見られている。自然の偉大な力と人々の営みを考えさせるに大変意義のある遺跡であるとする。
- 和賀江島の石積み防波堤の海洋港湾技術は、江戸時代の台場建設、そして、我々のテーマとする海堡建設に受け継がれたことを忘れてはならない。

これらのお話を伺って、潮の引いて、石のゴロゴロした和歌江島碑周辺を歩き、次の目的地、光明寺へとむかう。

この光明寺は、天照山蓮華院光明寺といい、浄土宗の大本山で、創立は鎌倉時代の寛元元年で西暦 1243 年といわれている。寺を開いたのは浄土宗三祖然阿良忠上人といわれている。

江戸時代になると、徳川家康がこの寺を関東における念仏信仰と仏教研鑽の根本道場としたため、隆盛を極め、今でも境内には大きな山門や本堂が残っている。

毎年十月に行われる「お十夜」という法要は有名である。

次はバスにて、鎌倉八幡宮二の鳥居ちかくのお店にて、昼食、その前に小坂会長より挨拶と第一海堡・第二海堡保存に関する最新の現状報告がなされました。尚、昼食はうな重でした。



光明寺（2007. 9. 25 撮影）



小坂一夫会長の挨拶と報告（2007. 9. 25 撮影）

お腹もいっぱいになったところで、鎌倉市役所へ。それほど大きくはないが、りっぱな会議室に通され、世界遺産への鎌倉市の取り組みを伺う。説明をしてくださったのは世界文化遺産登録推進担当の島田課長さん。

先ず、我々に配布された資料の説明がされた。どの資料もカラフルでなかなか力を入れていることが感じられた。



世界文化遺産登録推進担当の島田課長（2007. 9. 25 撮影）

世界遺産への取り組みを日本全国の他遺産を含め、今日までの経緯を説明があり、鎌倉は初期の段階リストアップされていた。しかし、古都として先に指定された奈良・京都との違

いを明確にすることを迫られている。

そこで、鎌倉独自のコンセプトとして、武家が造った都をいうことを、前面に打ち出す。そして、それを実証する根拠、証拠を揃える。そのためには学術的調査によって、建物、史跡の調査などをさらに、精緻に進め、その真正性をもつ。

また、国県市が一体となって、登録に取り組んでいるところをPRする。そのためには国の史跡指定を多く増やしたり、保存管理計画を策定し、国県とも連携を図る。

又、新しい考えとして、バッファゾーン（緩衝地帯）を確保し、文化遺産の価値や環境を保護する。そのことによって、周囲の施設等には利用制限区域を設けるなど、文化遺産を守っていく、街づくりの柱とすることを強調された。話は1時間余、熱心にされた。鎌倉市の取り組みが感じられるお話であった。

若干の質問があり、会長のお礼の挨拶があり、終わった。

鎌倉市役所を出て、時間もまだあったので、鎌倉駅近くで、夷堂がある日蓮宗のお寺本覚寺、そして、比企ヶ谷にある妙本寺、ぼたもち寺・常栄寺を通して、日蓮上人辻説法跡で、見学を終了した。皆さんそろって、鎌倉駅へ。

武家の古都・鎌倉を堪能した一日でした。

小林一茶と富津

東京湾海堡ファンクラブ会員 藤平 俊雄

「鋸山見学会」において案内役の県立天羽高校高梨先生の説明は、鋸山の地勢から歴史、文学と多岐にわたり、興味深く、鋸山登り口付近のひなびた古社では小林一茶の金谷来訪にも簡単に言及されていた。

一茶と富津市とのかかわりは、地元富津では割合知られていることではあるが、参加者の中に関心を持たれた方がおられたようなので、富津在住の会員として「小林一茶と富津」について紹介します。

小林一茶(1673~1829)は、江戸在住時にはしばしば各地を俳諧行脚しているが、41歳から55歳にかけての時期は、安房・上総・下総の房州三国を足繁く訪れ、その地の俳人仲間と交歓した。とりわけ、上総国への巡歴は十数回に及び、木更津や富津、金谷(現在は富津市)、元名(鋸南)を訪れている。

最初の金谷入りは享和3年(1803)6月で、この時に鋸山を吟じたと思われる一句

我上にふりし時雨や上総山

一茶は、その後数回、金谷に来ているが、金谷での立寄り先は、華蔵院の砂明上人、小錦鹿尾(金谷村の名主であるという)などであるといわれている。

華蔵院には一茶直筆の双幅の軸、「墨絵の松」と「はつ雪や今行く里の見へてふる」の自作の句を大書した俳句軸が残されている。

江戸から金谷までの道筋は、江戸日本橋の木更津河岸から船で木更津に渡り、陸路富津へ出て金谷という行程が多かった。江戸を明け六つ刻(午前6時頃)の早暁にたてば昼八つ刻(午後2時頃)には早くも木更津に着く。海路の利用は驚くほど速かった。

明治中期、夏目漱石が房総旅行(『木屑録』)をしたときも東京霊巖島から船に乗って保田に上陸している。

一茶の上総行脚の際の拠点、富津であり、同地には大乘寺住職の徳阿上人、寺僧砂明、糟谷文東(医師)、織本花嬌、貞院尼など多くの俳諧仲間がいた。

こうした文人たちと親交を重ね、文化6年(1809)には一茶、徳阿、文東、花嬌、子盛によって五吟三十六歌仙が巻かれている。

富津俳諧グループとの交流は濃密なもので、富津への来訪は12回を数えているが、何といても目を引くのは、吟詠に表れた一茶の花嬌に対する想いである。

織本花嬌は、本名を園といい、代々名主をつとめ、酒造業や金貸業を営む地元の豪商織本家に嫁いだが、一茶が富津を訪れる頃には未亡人となっており、娘曾和の婿子盛に身代を譲り、隠居して風雅に遊ぶ自適の生活を送っていた。僧砂明は花嬌の弟で、「砂明」の名は花嬌の夫嘉右衛門の俳号を受け継いだものであり、砂明は、金谷華蔵院の住職である。

花嬌は才色兼備な人のようで、一茶はその上品な美しさを「うつくしき団扇持けり未亡人」、「五十年見れども見れども桜かな」などと吟じている。また、雨月坊という俳人は、一条天皇の中宮彰子の女房紫式部や皇宮定子に仕えた清少納言にも劣らない才媛であると絶賛したという。

一茶は、地元名家の俳諧に優れ、美しくもあつた未亡人に想いを寄せ、牽牛と織女が出会う七夕の夜、「我星は上総の空をうろつくか」と乱れる心を表現する。

しかし、花嬌は文化7年(1810)4月に急逝する。

一茶は追悼句で、この世ははかなく無常であることは心得ているが、花嬌のいない今、そのはかなさは一層身に沁みると悲嘆した。

「露の世は得心ながらさりながら」

花婿死去の際、一茶は流山・市川方面を巡歴中であり、その死の報は江戸に帰ってから知ることとなり、葬儀には間に合わなかった。

百ヶ日法要・新盆会(文化7年7月)に参列し、別れを告げた。

「草花や、いふもかたるも秋の風」

「葬(アガワ)の花もきのふのきのふかな」

花婿の在りし日を思い、語るたびに涙が誘われ、墓前の草花に吹く秋風を悲嘆の声と聞き、日の光とともにしおれていく朝顔の花が日一日と変わっていくように美しく、可憐だった人も過去の人となっていくと愛惜する。

三回忌にも大乘寺に赴き、次の追善句を詠む。

「目覚ましのぼたん芍薬でありしよな」

「何をいふはりあいもなし芥子の花」

ぼたん芍薬は、美人の象徴であるが、あなたは本当に美しいぼたん、芍薬であった。そうしたあなたがいなことを想うと今、眼前に咲いている美しい芥子の花もむなしく感じられ何を言う気にもなれないと、花婿不在・欠落の空虚さを嘆いている。

花婿追善法要における一茶の追悼句は、哀切で悲痛でもあり、花婿に対する胸中の想いが推察される。

こうした点を捉え、一茶研究者の中には花婿を一茶の恋人とする説があり、この説の当否においては一茶と出会った頃、花婿の年齢はいくつであったかということが論点の一つとなっている。花婿の生年が不明であるため、一茶が頻繁に富津を訪れたとき花婿が相当の高齢であれば、恋人説は成立しないとするのである。

逆に花婿は、一茶をどう見ていたのかであるが、残されている記録が無いので断定できないが、花婿は地元名門の未亡人であり、他方一茶は俳壇で名前が知られだしたとはいえ、いまだ放浪の俳人であるという境遇を踏まえれば、花婿が一茶の思いに顧慮したとは考えにくい。そして何より、亡き夫への花婿の次の静謐な追慕に満ちた一句があり、これを手がかりとして、花婿への一茶の想いは、一方的な「片思い」であったと推量する。

「若草やいとしき人のむかし道」

花婿の没年は文化7年4月3日で戒名は「妙蓮院珍誉宝台花婿禅尼」、墓は大乘寺にあり、県の指定史跡となっている。



金谷華蔵院(真言宗智山派)
一茶直筆の軸双幅を所蔵する。



富津大乘寺(浄土宗) 織本花婿の墓



富津市役所 織本花婿句碑

織本家に現存する唯一の花婿自筆の短冊

「かた羽つつ時雨ほすなりうの夕日」の句が刻まれている。

【参考図書】

『富津市史』

杉谷徳蔵『小林一茶と房総の俳人たち』

北小路健『一茶の日記』

大場俊助『一茶の愛と死』

小林雅文『一茶と女性たち』

田辺聖子『ひねくれ一茶』

父と歩んだ砲台めぐりの旅

1. 第一海堡

神奈川県三浦市在住 山本 忠夫

第一海堡での暮らし

1. 第三海堡引揚げ建造物の展示会に参加して

2005. 11. 12 横須賀市追浜の岸壁で開催された第三海堡の引揚げ建造物を見学した。私も小さい頃、第一海堡でくらしがあったので、大変興味を持ち参加致しました。私の父山本義孝は陸軍の砲兵として観音崎三軒家砲台→第一海堡→房総見物砲台→三崎城ヶ島砲台の監守として勤務した事もあり、当時の様子を調べようとしたが、戦争中の事を調べるのに大変苦労し途中でやめていた時にこの展示会の見学で、地域開発研究所の高橋悦子さんのご協力もあり、2005年、横須賀の中央図書館で「第一海堡で生まれて」という講演をされた愛知の石見潔様の住所を教えてください、何度か電話やお手紙でお話を伺う事ができました。その結果、偶然にも私の父・山本義孝（1906. 2. 22 生）も陸軍砲兵として石見様のお父様京一さんのすぐ後に第9代第一海堡の監守として勤めていた事がわかり、しかも妹禮子がここで生まれたということもあり、父と歩んだ砲台めぐりのくらしをまとめてみることにしました。

2. 父 山本義孝の履歴

父 山本義孝（1906. 2. 22 生、1993. 3. 7 死去 87 才）、母 千鶴（1908. 12. 3 生、1976. 3. 12 死去 68 才）

1927. 1. 10 徴兵として横須賀重砲兵聯隊第3中隊に入隊

1929. 2. 1～11. 26 第1回砲塔術練習生として陸軍重砲兵学校に分遣

1931. 8. 7 横須賀重砲兵聯隊付東京湾要塞司令部附となる
その間軍用鳩通信術修業のため軍用鳩調査委員事務所に派遣、軍用鳩通信術修業修了

1933. 5. 10～1934. 3. 25 観音崎第4、第6砲台（三軒家砲台）
監守 父 27 才、私 忠夫誕生（二男）

1934. 3. 26～1935. 6. 21 第一海堡砲台監守 父 28 才、妹 禮子誕生（長女）

1935. 6. 22～1937. 2. 21 房総第4区見物砲台監守 父 29 才～30 才

1937. 2. 22～1938. 10. 19 三崎第3区城ヶ島砲台監守 父 31 才、弟 武夫誕生（三男）
その後は要塞司令部にもどり横須賀市公郷町に住み、東京湾要塞の警備

にあたり、三崎糧秣支庫長三浦地区
経理委員などを経て終戦を迎える。
弟 武夫病死、弟 信夫（四男）、昭夫
（五男）誕生

1945. 8. 31～10. 30 解隊後東京湾要塞引渡し要員として残留
父 39 才

3. 調査の過程

2005. 11. 12 第三海堡引揚げ建造物展示会に参加

2006. 2. 1 東京湾口航路事務所、財務省千葉財務局、自然
人文博物館 菊池先生に文書、電話連絡
地域開発研究所 高橋悦子さんに文書、防衛庁へ
文書、電話連絡

2006. 2. 17 千葉財務局 小泉さんより電話、不発弾があるの
で上陸許可できないとの事

2006. 3. 20 防衛庁防衛研究所史料閲覧室へ行く、原剛先生
と会う

2006. 4. 3 地域開発研究所 高橋悦子さんをたずねる、西田
好孝氏と会う

2006. 4. 4 海堡ファンクラブ 仲野正美さんから電話

2006. 4. 7 石見さんより電話

2006. 4. 15 石見さんより文書届く

2006. 5. 16 東京湾口航路事務所調査船で船上より第一海堡
視察

2006. 5. 17 防衛研究所で原剛先生と会う（指導を受ける）

2006. 6. 11 石見さんから講演会へのお誘い
この日は館山の見物砲台へ
この後、見物砲台の件、調査のため加賀名の小
宮敬一郎方へ3～4回足を運ぶ

2006. 11. 18 城ヶ島砲台について県立公園事務所今津さんを
たずねる
その後集中的に城ヶ島砲台の現地調査
原剛先生をたずね、城ヶ島砲台の話をお伺い

2006. 12. 26 仲野正美さんより東京湾海堡ファンクラブへ
のお誘い 欠席

2007. 4. 12 富津公民館長 松本庄次さんをたずねる。長浜彰
さん宅を訪問

2007. 5. 24 富津岬荘へ宿泊、霧の会の平野さん、長谷川さ
んの案内で第一海堡へ
座礁船があり上陸できず、海堡ファンクラブ 小
坂会長と会う

2007. 5. 31 防衛研究所 原剛先生をたずねる

2007. 6. 12 平野さんの船で上陸、官舎跡や砲台後を見学

4. 第一海堡での暮らし

私は、1933. 6. 7 三浦郡浦賀村三軒家陸軍官舎で父 義孝(当時 27 才) 母 千鶴(当時 25 才) の二男として生まれ、翌 1934 年には千葉県君津郡富津町黒塚 2432 第一海堡陸軍官舎へ 9 代目監守として赴任し、ここ第一海堡で妹(長女) 禮子が誕生した。

第一海堡には 3 つの砲台があった。第一砲台は 15 センチカノン砲(加農) 4 門、第二砲台には 15 センチカノン砲 2 門が 2 基、第三砲台には榴弾砲 4 門の計 12 門が備え付けてあった。それぞれの砲台の地下兵舎と結んだ通路ができ往き来できる様になっていた。

これら砲台の砲座の清掃のため日曜日を除く毎日午前 8 時から午後 5 時まで富津から約 1 時間かけ砂浜を歩いて来られる職工さん(長浜彰様のお父様の長浜寅吉さん) と私達家族の 4 人だけの生活であった。私達幼い 2 人がいたため母の妹英子(立川市栄町在住昨年 12 月 25 日 85 才で死去) が前以って父に連絡、要塞司令部の許可を取り横須賀の安浦港から陸軍の船か富津の砂船の帰りに乗せて頂き手伝いに来てくれていたそうです。

私も妹も小さく全く記憶にないが、父、母、オバから伝えた話によると、

・電気も水道のない暮らし

いざという時、横須賀の重砲兵聯隊から多くの兵隊が来る地下壕の兵舎には自家発電の設備はあるものの日常は使用することなく、離れて港附近にあった官舎にはろうそくやランプの生活であり、母はランプの火屋(ほや)の掃除が大変だったとよく言っていた。水も電気と同様、兵舎のくぼみには大きな溜池があり、わき水や雨水を貯めていたが、官舎は雨水をろ過する装置(砂などが入っていてごく簡単なもの)のついたもので、食器洗い、洗濯などに使い、飲み水にもわかつて使ったりしていたが、飲料水は陸軍の船で横須賀からタンクに入れ運んでもらっていた。一滴の水もムダには使ってはならなかった。

・買い物

主食や日常生活に必要な買い物は、歩いて富津から運ぶのが困難であったため、我が家の場合は横須賀へ陸軍の船を使って時々行った。又、妹が生まれる時は富津で産婆さんの手配が出来ず、横須賀から陸軍の船で来ていただいたとか。

・通信

通信の手段も要塞司令部を経て許可を受け、取りついでもらったりただけで普段は電話など出来なかった。又、父は鳩通信術の講習を受けていたので、伝書鳩を使い必要な連絡

をとっていたようです。原剛先生のお話では第一海堡だけでなく、各地で通信手段として伝書鳩が使われていたそうです。官舎の前にも鳩小屋があり、父がよく言っていました、「東京湾をよこぎりよく富津まで休まずにとべたものだ」と感心していました。

・写生、写真撮影の禁止

軍の監視も厳しく島での家族の写真、写生も禁止。ましては第一海堡の内部の地図や写真などは言うまでもない。翌年館山の見物砲台に動いた時にも、千葉県の東京湾沿いの木更津から館山の間は官憲が厳しく列車の東京湾側の窓はシャッター(よろい戸)をおろす様放送があり、その筋の見廻りもあり大変だったとよく話を聞かされたものだった。又、他へ行っても島の話など一切することもできなかった。

・その他

父は口数も少なく大変厳しい人だった。官舎が港のすぐ前にあったせいか父は夜魚釣りをしたり、貝を掘ったりした。嵐で打ちあげられた魚やタコ、えび、又、大きい魚に追われ砂浜に追い込まれ波打際ではねている小魚など自然の恵みもありがたかった。

5. さいごに

明治 14 年以来大正 10 年まで約 40 年間にわたり海堡建設に費やしてきましたが、関東大震災のため第三海堡は大きな打撃を受けると同時に砲台設置の再検討もあり旧式火砲の廃止、私達の住んでいた昭和 10 年頃より対潜水艦の砲台としての機能も終わり、要塞としての役目も終わりました。

それから現在まで自然災害により、特に南側護岸が小坂会長の撮影された写真のようにその四分の一程度しか残っていません。又、北側私達が住んでいた官舎の前の港もすっかり砂でうめつくされ建設当初のおもかげもないようです。これ以上、被害が大きくならぬうちに千葉県として富津市に払い下げ、国立公園化するなり有効利用を考えてほしいものです。(三浦市栄町 22-12)

富津議会 平成 19 年 9 月定例会

平成 19 年(2007 年)9 月の富津市議会の定例会において、鈴木敏雄議員が第一海堡と第二海堡の活用について質問されました。そのときの議会記録を掲載します。

[平成 19 年 9 月定例会-09 月 06 日-02 号]

◆17 番(鈴木敏雄君) 私も交流人口をふやすためには、観光資源の見直しということが一番必要だと思います。一つの

提案に近い形になりますけれども、先ほど来、申し上げておりますが、商工会あるいは観光協会が合併をし、大きく状況も変わっておりますので、まず今ある観光資源を知ることや、掘り起こしをやっていただいて、富津市の観光振興5カ年計画、あるいは(仮称)観光ビジョン21とか、そういうものをつくっていただきたいと思います。これにはいろいろな手法がありますので、行政のリードで研究されて、富津市は何を売っていくのかを計画に盛り込んでいただきたいと思います。

最後になりますけれども、2点ほど伺いをします。富津岬には海堡があります。三海堡は撤去したと聞いております。一海堡、二海堡をつくるに当たって富津漁民が相当御苦労され、犠牲者も出ているように聞いております。しかし、この土地は財務省が持っており、管理は海上保安庁と聞いておりますけれども、先ほどから申し上げますとおり、難しい問題はあるかと思いますが、こういうものを掘り起こして、文化財あるいは観光の面で活用していったらと思うことが1点です。

それと、私は過去の一般質問で富津市在住の著名人の方をお願いをして、地域の固有性、独自性ということで、ここにしかないものをつくっていったらどうかという提案といたしますか、質問をさせていただきました。今、富津市で全国的に一番人気のある著名人は浜田幸一さんなのです。ハマコーさん。宮崎県の知事の問題もありますけれども、ふるさと観光大使をお願いをして、観光の振興あるいは富津市のよさというのを宣伝していただきたいと思いますが、この2点、最後です。よろしくお祈りします。最後は市長の考え方をお聞きしたい、お願いします。海堡については……

○議長(嶋田政市君) 経済環境部長、中島照夫君。

◎経済環境部長(中島照夫君) 海堡について、観光の視点から答弁させていただきます。確かに海堡については、明治時代に築造されまして、東京湾口のランドマークとして位置づけられております。歴史、文化的には貴重な遺産であることは承知しております。観光資源としての活用を図るためには、護岸の崩壊や不発弾が残っている可能性があることから、危険防止のため、現在は上陸禁止になっております。このようなことから、海堡の活用については法規制や安全面を考慮しますと、相当な日数と費用がかかると思われます。そういうことから、観光資源として陸や船から眺望するというようなこと、また、本年、富津市観光協会富津支部で実施しました海堡まつりなどのソフト面での観光の振興を図っていきたいと思います。以上です。

○議長(嶋田政市君) 17番、鈴木敏雄君。

◆17番(鈴木敏雄君) 2つ目は、市長、お願いします。

○議長(嶋田政市君) 市長、佐久間清治君。

◎市長(佐久間清治君) 観光大使の関係ですけれども、せんだつての8月に、第1回海堡まつりのときに、歌手の井上由美子さんの曲が富津にぴったりだということで、観光大使を富津市観光協会をお願いしたところであります。井上さんもラジオ番組を持っていて、そこで毎週、富津のことをPRしていただいて、また、御自分の名前のついた商品もPRしたり、これは富津市で販売しているわけでございますけれども、そういうPRをしているところであります。今、御提案いただきました件につきましては、観光振興、あるいは市の市政推進についてもいろいろ御助言いただける場所とは思っていますので、先方の都合等々もあろうかと思っておりますので、その辺はまた調整させていただきたいと思っております。

○議長(嶋田政市君) 17番、鈴木敏雄君。

◆17番(鈴木敏雄君) きょうは、各般にわたり御答弁いただきました。ありがとうございます。私の質問は終わります。

吉本充県議の県議会での質問

平成19年12月千葉県定例県議会で吉本充県議が一般質問に立ち、「富津岬前面の第一・第二海堡を世界遺産に」と提言しました。

■富津岬周辺の要塞群 千葉県の新しい観光スポット

吉本県議 富津岬の前面海域に存在する第一海堡、第二海堡は、世界的にも高度な港湾築造技術を持つ文化遺産である。国は先般、崩落のおそれのある第二海堡を航行船舶の安全を守る意味から、修築工事を実施する方針を打ち出した。どんな工事で、いつ頃終わるのか？

農林水産部長 国の計画は、第二海堡西側の約170mについて、護岸改修を行うという内容で、平成23年に完了の予定である。なお、工事にあたり漁業への影響を最小限とする工法を採用することになっており、地元の漁協も了承している。

吉本県議 海堡など軍事に関する遺跡について、文化庁が全国調査を行い、富津の第一、第二海堡も、その中に含まれていると聞いている。その結果はどうだったのか？

教育長 全国調査の結果、平成14年度に50件が詳細調査の必要な遺跡に選ばれているが、第一、第二海堡もこの詳細調査の対象となっている。これに基づき、平成16年2月文化庁の手で現地調査が行われた。現在文化庁で報告書を作成中

である。

吉本県議 第一、第二海堡を含む東京湾要塞群を世界遺産に登録し、末永く保存すべきと思うが、県当局の考えを聞きたい。

教育長 世界遺産への登録には、国の史跡指定が前提となる。文化庁とも連絡を密にして、研究していくことにしている。

吉本県議 第一、第二海堡を観光資源としてもっと活用する考えはないか？また、その際に〈国土施策創発調査〉に応募することも検討すべきでは？

知事 明治期以来の首都防衛に関する歴史を身近に感じられる体験ツアーが想定されるなど、千葉県の新しい観光スポットとして可能性があると思う。国が実施する国土施策創発調査への応募について、地元とも協議のうえ考えたい。

いる人々が多くいた。

その近くで新たに4枚の立ち入り禁止の看板と、海堡をぐるりとまわってもらったところ、東側に4ヶ所、南側に1ヶ所、西側に1ヶ所（第二海堡側）と計10ヶ所新たに増設されていたことがわかった。



2007年8月12日撮影

海堡関連新聞記事

関東大震災直後に、第三海堡の震災被害を伝える新聞記事を見つけましたので、報告します。この記事では、「第三海堡にいた兵士は惨死したと察せられる。」と書かれています。地元・横須賀市の古老の話では、板きれなどを持って海に飛び込み、大津（横須賀市）まで泳いだと伝えられています。

(事務局 高橋悦子)



第一海堡に更に立ち入り禁止の看板ふえる

東京湾海堡ファンクラブ会長 小坂 一夫

8月12日(日)午前8時ころ、朝日新聞高山記者の要請で、会員の平野正美さんのモーターボートで海堡巡りをした。相変わらず、もとの北側の港あとの立ち入り禁止の看板のまわりには、テントを張ってキャンプやバーベキューを楽しんで

東京要塞第三海堡は大地シンの爲め海中にカン没した衝合にあつた兵士は惨死したるものと察せらる

第三海堡陥没す

国民新聞号外 大正12年9月7号

「海堡」 *kaihou* No.19

—東京湾海堡ファンクラブニュース— 第19号
東京湾海堡ファンクラブ 2008年3月31日発行

事務局 〒110-0015 台東区東上野2-7-6 東上野T.Iビル
(株) 地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局
電話 03-3831-2917 FAX 03-3831-6259